Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P2-283 体外受精胚移植後の妊娠初期血中hCG値のDoubling Timeと妊娠予後

北里大
川内博人，中村水緒，本橋恵美子，武井英理子，藤田一博，石川雅一

【目的】体外受精胚移植後，一定の時期に測定して血中hCG値によって妊娠予後を推定するこころみは多くなされているが，経時的採血によりDoubling Time（DT）を算出しこれによって妊娠予後を推定した報告は少ない．そこで今回我々は，血中hCG値のDTで妊娠予後の推定が可能か否かを検討した．【方法】2000年1月より2003年7月までに，当科で体外受精胚移植を行ない，胚移植後12日目に血中hCG値の上昇によって妊娠の成立が確認され，その後正常単胎分娩，流産（胎嚢確認），化学的妊娠（血中hCG値の上昇のみ）に至った71例を対象とした．血中hCG値は胚移植後12日目からほぼ1日おきに測定した．DTは妊娠4週半（A）と5週半（B）の2つの時期で算出し，どちらがより妊娠予後の推定に有用か検討した．【成績】それぞれのDTは，A：正常単胎分娩群35.2±11.3時間，流産群46.7±31.1時間，化学的妊娠群53.4±28.3時間（正常単胎分娩群と化学的妊娠群に有意差あり，$p<0.05$）．B：正常単胎分娩群33.2±9.4時間，流産群60.7±45.8時間，化学的妊娠群58.3±46.8時間（正常単胎分娩群と流産群，正常単胎分娩群と化学的妊娠群に有意差あり，$p<0.05$）であった．また，ROC曲線による検討からは5週前半のDTがより有用と考えられた．【結論】5週半におけるDTの妊娠予後の推定の有用性が示唆された．

P2-284 IVF－ET妊娠初期hCG値と妊娠予後の相関に関する解析

琉球大
神山　茂，山城貴恵，照屋陽子，金澤浩二

【目的】hCG産生は絨毛のvolume，viabilityに依存しており，とくに妊娠初期のhCG値は多胎妊娠，妊娠予後を予知する上の情報となりうる．IVF－ET後妊娠の初期hCG値とその後の妊娠経過との関連について，後方視的に検討した．【方法】1995.1～2004.6におけるIVF－ET後妊娠成立195例中，血中hCG値を測定し，かつ妊娠経過を追跡できた144例を対象とした．IVF－ETは通常の方法で行い，ETは採卵後2日目に施行した．血中hCG値測定は，ET後12日目（妊娠4週0日に相当）の受診時に行った．妊娠診断は，経腟超音波下の胎嚢確認により行った．【成績】1）妊娠例144例中47例は流産，97例は妊娠継続となった．hCG値は各々120.3±77.1mIU/mL，177.5±123.8mIU/mLで，有意差をみた（$p<0.001$）．流産率はhCG値が<80mIU/mLでは58.8%（20/34例），≧80mIU/mLでは24.5%（27/110例）であり，前者で有意に高率であった（$p<0.001$）．2）胎嚢1個確認106例，2個確認37例でのhCG値は各々125.1±75.9mIU/mL，248.9±145.3mIU/mLで，有意差をみた（$p<0.0001$）．3）FHB 1個確認は90例，2個確認は27例であった．hCG値は各々135.1±76.6mIU/mL，281.7±159.2mIU/mLで，有意差をみた（$p<0.0001$）．多胎率はhCG値≧200mIU/mLで50.0%（17/34例），<200mIU/mLで9.0%（10/111例）であり，前者で有意に高率であった（$p<0.0001$）．4）FHB 2個確認27例中1個継続2例，2個とも継続25例でのhCG値は各々189.7±21.1mIU/mL，289.0±163.1mIU/mLで，有意差をみた（$p=0.013$）．【結論】ET後12日目の血中hCG値は，流産か妊娠継続か，多胎か単胎か，を含むその後の妊娠経過を予知する場に有用な情報となる．

★P2-285 生殖補助医療で一絨毛膜性多胎妊娠は増加する

静岡・聖隷浜松病院
松本美奈子，村越　毅，安達　博，尾崎智哉，渋谷伸一，成瀬寛夫，中山　理，鳥居裕一

【目的】近年，生殖補助医療（ART）に伴う多胎妊娠は周産期医療において重要な問題であり，特に一絨毛膜性多胎妊娠は双胎間輸血症候群などハイリスク妊娠である．一般的に一絨毛膜性多胎妊娠の自然妊娠においての発生率は0.3～0.4%とされている．今回，ARTにおける一絨毛膜性多胎妊娠の発生率と危険度を検討することを目的とした．【方法】1989年10月から2003年12月の期間に，当科でARTを施行した妊娠例701例を対象とし，ART全体と，顕微授精（ICSI），凍結胚移植，胚盤胞移植における一絨毛膜性多胎妊娠の発生率を比較検討した．【成績】一絨毛膜性多胎妊娠の発生率はART全体で1.28%（9/701）でオッズ比は4.32（95%CI：1.2－16.0）と有意に高かった．技術別での内訳はICSIでの発生率は1.15%（2/174）でオッズ比3.86（95%CI：0.64－23.3），凍結胚移植では0.6%（1/164）でオッズ比は2.04（95%CI：0.21－19.7）で，高い傾向はあるものの有意差は認めなかった．しかし，胚盤胞移植では発生率3.30%（6/182），オッズ比11.3（95%CI：2.8－45.7）であり，自然発生頻度に比べて有意に高かった．【結論】生殖補助医療において一絨毛膜性多胎妊娠は一般頻度より増加すると考えられた．特に胚盤胞移植においては11.3倍の危険度が認められた．

NII-Electronic Library Service